

病者と仏教

岡本健資
龍谷大学

仏典における「病」に焦点をあてた研究を、近年、特によく見かけるようになった。これらの研究には、医療従事者によるものも少なくない。高齢者の増加にともなう終末期医療活動の増加は、医療従事者をして宗教の役割に注意を向けさせる機会を増やし、宗教に関わる者に医療活動へ参加する取り組みを促しているようである。現代の仏教徒の取り組みとしては、終末期医療の場としての仏教ホスピスの設立や、悩みをかかえる罹病者との対話としてのカウンセリングの実践など、多方面にわたっている。もちろん、このような、仏教と医療との関わりは、現代において新しく発生したものではない。日本において、仏教ホスピスに類する施設を探せば、奈良時代の悲田院など、仏教寺院や関連施設がその役割を担ったことが知られるし、仏教徒が終末期の人と向き合ってきたことは、比叡山の二十五三昧会のように、終末期の人々と仏道修行（念仏）を協同する実践にも見られる。仏教は、今日的な意味での終末期医療活動の動向と関係無く、あるいは、そういった概念が導入される遙か以前から、医療活動とかかわりを持ってきたのである。

上記のような仏教徒の実践の背景には、インド以来、仏教徒が人間が回避できぬ四苦の一つとして「病」をとらえ、絶えず向き合ってきた姿勢が存在すると考える。仏典における「病」に言及する記述は、パーリ律蔵「小品」(Mahāvagga) に、初転法輪時の五蘊無我の説明時にも見出され、あるいは、大乘文献『維摩経』でも、維摩の言である「以一切衆生病是故我病」の中にも譬喩として現れている。「病」は様々な仏典を通して見出せる重要なテーマの一つである。発表者は以前、『雑阿含経』に含まれる事例を取り上げ、病に罹った「在家者」や「出家者」に対する説法の内容について検討した。今回は、阿含やニカーヤなどに含まれるさらに多くの事例を取り上げて検討し、「病」に向き合ってきた仏教徒の姿勢を探り、現代との関わりを考えていくことにしたい。

キーワード： 病、医療、実践、阿含、ニカーヤ